

肩関節前方関節唇の検討

—脱臼例と亜脱臼例の比較—

昭和大学藤が丘病院整形外科

安 楽 岩 嗣・山 本 龍 二

筒 井 廣 明・黒 木 良 克

Changes of the Anterior Labrum

—In Cases with Dislocation and Subluxation—

by

I. Anraku, R. Yamamoto, H. Tsutsui
and Y. Kuroki

Department of Orthopaedic Surgery Showa Univ.
Fujigaoka Hospital

The instability of shoulder joints has come to notice, recently. In cases with dislocation of shoulder joints, deformities of the anterior labrum of the humeral head have been important and necessary for its diagnosis and treatment. But in cases with instability of shoulder joints, there are no peculiar changes in the joint structure present.

In order to find out the changes in the joint structure, we have tried arthroscopy in these cases. Up to the present, we have performed arthroscopies on 47 shoulder subluxations and 13 shoulder dislocations enabling us to find out various changes.

This paper deals with representative arthroscopic findings and operative findings and reports of a comparative study with pathological findings for cases with dislocation and instability.

We suspected, particularly in the anterior labrum, the changes would be placed a little differently depending on whether the case was one of dislocation or one of instability. In cases of dislocation the changes were mainly in the lower part of the anterior labrum, but in cases of instability they were found a little higher up. In pathological studies of fibrillated or detached labra, it was more difficult to see the changes in cases of dislocation than in cases of instability.

But in some cases of dislocation, which had occurred in simple everyday actions, the scopic and operative findings were the same as cases of instability.

As mentioned above, it is necessary to consider the evidence of joint instability when we wish to treat cases of frequent recurrent shoulder dislocations.

特因なく肩関節痛あるいは関節不安定感、脱力感を訴えて来院する症例の中には肩関節の不安定性を認めるものが少なくなく近年注目をあびている。従来より肩関節前方脱臼に関しては特異的な関節唇や骨頭軟骨等の変化が報告されているが、はたして亜脱臼例にでも、同様の変化が起こるのであろうか。我々は関節不安定性を有する症例に対して、その関節構成体の変化を探る為に関節鏡視を行なっている。今回は、反復

性前方亜脱臼例と反復性前方脱臼例に関して、関節不安定性の為に直接的な衝撃を受けるであろうと思われる前方関節唇の変化について鏡視像と術中所見を比較し合わせて病理学的変化を検討したので報告した。

対象および症例

今回対象とした症例は関節鏡を行なった60例である。その内分けは表1の如くである。

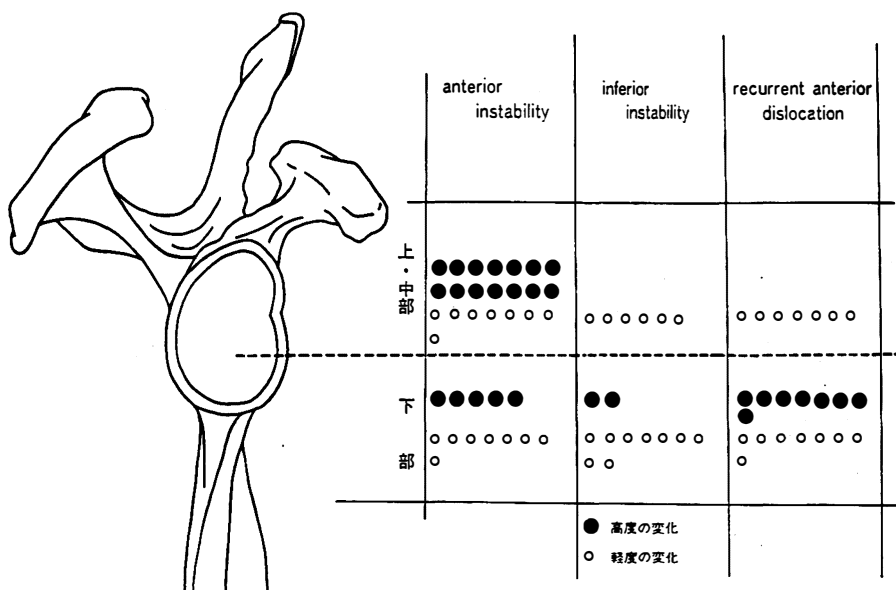


図 1

表 1 Cases

Recurrent anterior subluxation	47 cases
Recurrent anterior dislocation	13 cases
Total	60 cases

まず、代表的な症例を紹介する。

持続する関節不安定感、脱力感を主訴とする前方亜脱臼例の鏡視では、前方関節唇は、中央部にて前方へまくれ込む像を呈していた。しかし、上部、下部にて、その境界輪郭を明瞭に確認出来た。術中所見でも、関節唇の剥離はなく、中央からやや下方にかけて軽度の摩耗が見られるのみであり、あまり荒廃した感じはなかった。この摩耗した関節唇の病理所見をみると表層近くまで、弾性線維が豊富に存在し細胞浸潤はわずかであり、血管増生もなく炎症性変化に乏しい。

A. D. L. 動作における頻回の前方脱臼感と肩関節痛を主訴とする前方亜脱臼例では、鏡視にて前方関節唇は、ほぼ全域にわたり、完全に剥離し中央部にてあたかも膝メニスクスのパケツ柄損傷の様に遊離浮遊していた。術中所見でも、上中部の関節唇は完全に剥離し、容易に骨頭関節窩間に反転陥頓することが確認出来た。この剥離した関節唇の病理所見では、細胞浸潤

が著明で、間質は浮腫状を呈していた。

反復性肩関節前方脱臼の鏡視では、前方関節唇の上中部では、その輪郭は鮮明で、軽度の不整を見るだけであるが、下部に著明な不整像が見られ、一部剥離像も認められた。術中には鏡視像と一致した関節唇変化に加え亜脱臼例では、あまり見られない前方関節包の肩甲骨頸部よりの剥離が確認出来た。不整の見られる関節唇の病理所見では、表層は不整であり著明な細胞浸潤が見られ間質の弾性線維は乏しく浮腫状を呈していた。

結 果

代表的な鏡視所見術中所見及び病理所見を紹介した。我々が行なっている後方穿刺による前方関節唇の形態変化の把握は、ほぼ満足出来る結果を得ることが出来た。

図1は、今回検討した症例の前方関節唇の変化の分布をみたものである。前方亜脱臼では関節唇全体に比較的ビマン性に変化が見られ、やや上中部に多い傾向がある。これに対し、脱臼例では、変化の中心が下部に集中している。

関節唇の変化を病理学的に検討すると脱臼例において細胞浸潤、血管増生の炎症性変化が強く、また間質

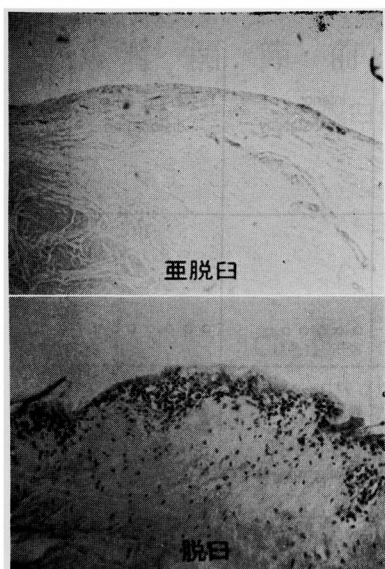


図 2

の弾性線維が減少し浮腫様変化が著明に認められる症例が多かった。(図2)

考 案

今回、反復性前方亜脱臼例と反復性前方脱臼例に関して、前方関節唇の変化について検討を加えた。我々は、亜脱臼例においては、関節の不安定性のために慢

性的に反復する刺激によって軽微ではあるが関節唇の広い範囲に変化が起こり、これに対し脱臼例では、単発的に一方向への比較的大きな外力によって初期には、局所的な変化にとどまるものであろうと考えている。しかし脱臼例でも A. D. L. 動作で頻回に脱臼をくり返している症例では、亜脱臼と同様に広範囲の変化が認められる。このような症例では、その基盤に関節不安定性の存在は否定出来ず、単に加わった外力の差により、脱臼あるいは、亜脱臼が生じるものであろうと思われる。そこで我々は、このような前方関節唇に広範な変化が見られる脱臼例では、その関節不安定性も十分に考慮した治療法が必要であらうと考えている。

以上、前方亜脱臼、脱臼に関して肩関節前方関節唇の形態変化につき検討したので報告した。

参 考 文 献

- 1) 池内 宏：肩関節の関節鏡視，関節鏡 3：1-5，1978.
- 2) 筒井廣明・他：肩疾患の関節鏡視，関節鏡 7：9-12，1982.
- 3) 筒井廣明・他：肩関節の関節鏡視（第2報），関節鏡 6：99-101，1982.
- 4) 滝川 昊・他：動揺性肩関節と肩関節脱臼，災害医学 XIX：39-44，1976.
- 5) 安楽岩嗣・他：肩関節鏡視 instability を有する症例の検討，関節鏡 9：69-72，1984.